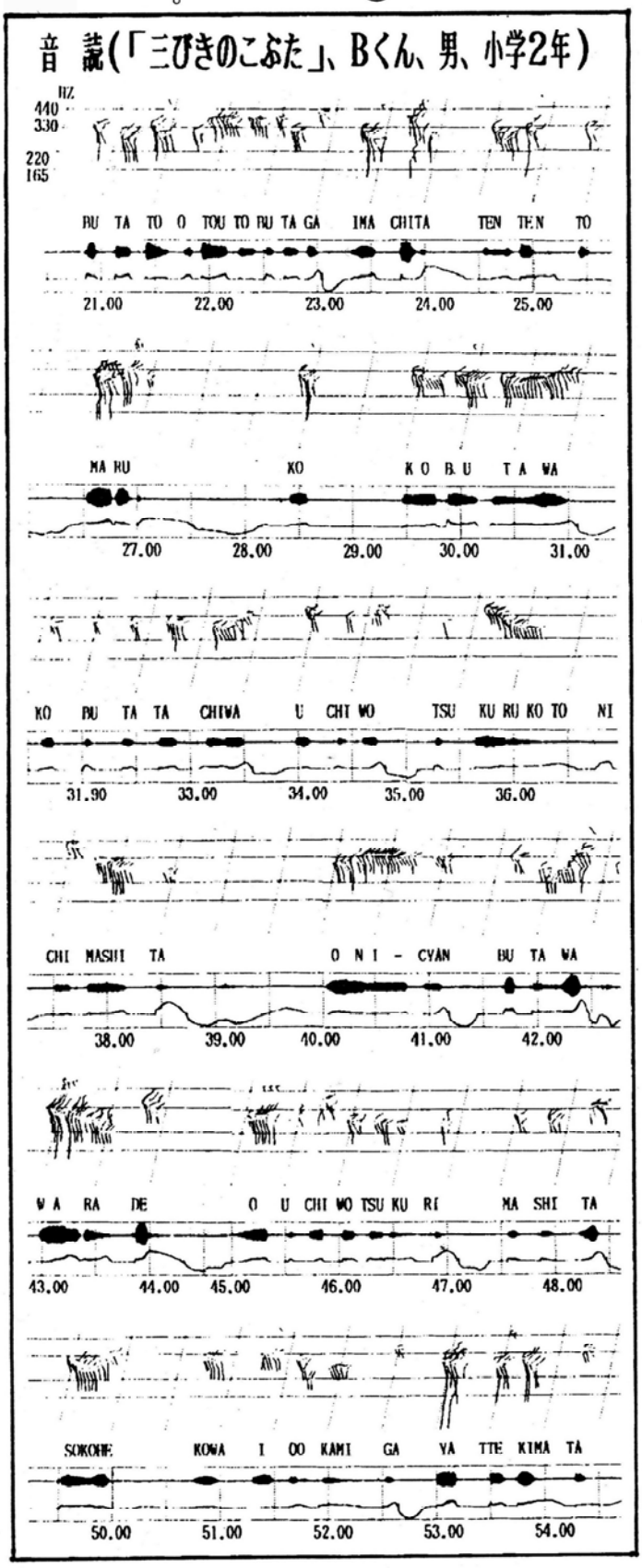
研究雑話（57）
人間発達の物質的基礎（二一）：コトバと叙述（六）音読の世界（「音節量」の調べ）

藤井力夫

前回は、素材や道具についても興味をもち、いろいろ説明できることが、話しことばの充実、とくにことばで整理したり計画を立てたりするのに大事で、これがまた書きことばへの背景をも形成するということをお話しました。「木の家を」だけでなく「木で家を」と言えること。たかが格助詞「の」と「で」の違いですが、そこには材料を説明しようという明確な意図が存在しています。「トントントン」といった擬態的な説明から、概念による説明への移行。そういってよいでしょう。何がそうさせるのでしょう。ことばをまとまりとして知覚できること。「韻律単位」で話し知覚する。これが可能。音読はこれを問う世界です。今回は、音読における「音節量」の利用についてお話したい。図は、音読時の音声スペクトル（基本周波数）による音高変化と呼吸位相。先回と同じ、障害児学級小学二年生・B君。絵本「三びきのこぶた」でいっぱいお話してくれました。字も読めます。そこで、筋書きをB４サイズに縦書きし、それを読んでもらいました。基本的には拾い読みですが、上手に音読できます。息継ぎもしっかりしています。「おにいちゃん」とか「やってきました」の読みも、／ニー／（長音）、／チャン／（撥音）、／ヤッ（テ）／（促音）とか、切らずに発音しています。CVV、CVC（C：子音、V：母音）。これを「音節量」といいます。CV（軽音節）でも、CVCC（超音節）でもない、「重音節」に相当。どうもこれが自然なようです。新しい考え方なので、証明はこれからですが、七五調など伝統的な日本語の調べが紐解けそうです。B君の場合の課題として例示しましょう。**例1**、／コブタタチ／：／BUTA／で一つのまとまり。ゆっくりでも切ってはならない。それで／コ／を前に出す（アウフタクト）。／◎コ／ブタ・タチ／ハ・◎◎／（◎：休み、息継ぎ）。これに対し、B君、／コ・ブ・タ／となり、／タチ・ハ／を／タ・チハ／としてしまう。**例2**、／**オウチ**／：これも同様、／UCHI／で韻律単位。／オ／を前に出し、／◎オ／ウチ・ヲ◎／。B君は、／オー・ウ・チ／ヲ・ツ・ク・リ／と読む。**例3**、／**コワイ**／：／WAI／は連母音で一単位。／◎コ／ワイ・オオ／カミ・ガ◎／。B君、／コワ・イー／オオ・カミ／ガ・◎／と読む。「音節量」が織りなす合理的な世界。高次神経活動たる所以の一つがここにあります。

（北海道教育大学教授）